

世界一やさしくない

日本人

ならば、どんな福祉をつくればいいの？

住民流福祉総合研究所

木原孝久

1.日本人のやさしさは125か国中125位

■英国の福祉機関（チャリティ・エイド・ファンデーション）による「あなたはこの1ヵ月で見知らぬ誰かを助けたか？」という調査結果（2019年版）で、日本は125か国中125位。つまり最下位だった。

■このコロナ禍で同じ調査をしてみたら、やはり日本は最下位だった。今回はコロナ禍のため電話調査で、調査対象は114か国の121,000人。

■調査は①人助け、②寄付、③ボランティアの3部門で実施されているが、今回は3部門の総合でも日本が最下位であった。

ワースト10の国のうちでも日本はダントツの最下位

■1位のインドネシアは、①「人助け」をした人が65%、②「寄付」83%、「ボランティア」60%で、総合すると69%。このコロナ禍でも8割の人が寄付をしていた。

■ワースト10の国のうち、日本以外の2位～10位までは25%～21%なのに、日本は3部門とも12%なので、ダントツの最下位と言える。

■寄付部門のワースト10はいずれも低所得から中所得の国で、日本のような「ベリーリッチ」な国は珍しいという。

2. やさしい国には助け合いの伝統が

■ インドネシアは「ゴトン・ロヨン」

インドネシアにはどんな強みがあったのかというと、伝統的に「ゴトン・ロヨン」と呼ばれる互助の文化があり、それがパンデミックという困難な状況下で活性化されたという。

■ アフリカでは「ウブントウ」

「人助け」では例年通り、1位を含め、トップ10のうち6カ国がアフリカだったが、これについても、アフリカのほぼ全土で「ウブントウ」という助け合いの精神が人々の生き方に根ざしていることが要因として挙げられている。

1 人だけで何かをしてはいけない

この「ウブントウ」について、『東洋経済オンライン』の「アフリカは『資本主義の限界』を見抜いている」という記事によれば、アフリカの道徳規範では、まず最初にくるのは「1人だけで何かをしてはいけない」ということだという。これはつまり、1人で抜けがけするのではなく、みんなで助け合い、成果も分け与えるということだ。

私が学生時代に文化人類学の講義でこんな話を聞いたのを思い出した。

アフリカでは、1人がたまたまバナナの生っている木を見つけたとする。しかし彼はそれを自分勝手に持ち帰ってはいけない。誰かがここを通りかかるのを辛抱強く待つ。その人とバナナを等分するために…

「上から目線と、負い目の関係を作るな」

同記事によれば、アフリカの道徳規範ではさらに、「与える人ともらう人の間に、『与えてあげた』という上から目線と『もらって申し訳ない』という負い目の関係ができないようにするモラルもある」という。

「常に『与える人』と『もらう人』が役割を変えながら、負債感や申し訳ないという感じが出ないようにするのがアフリカ流」だということである。

以下はまた文化人類学の講義で聞いた話。

人に物をあげるときは、それを直接相手に与えてはいけない。それを一旦、神棚にあげるのだという。(すると…)

これはもう神に返したのだから、自分の物ではない。誰が持ち帰ろうと、私の知ったことではない。

これで相手は負い目を持たずに持ち帰ることができる。

3.では、日本的やさしさとは？

これから並べる、日本的なやさしさをざっと見てみると、日本人のやさしさの性格がよくわかる。要するに、日本人は「奥手」なのだ。自分1人ではやらない、誰かが始めたら自分も始める、大勢を見て自分の動き方を考える。

言い換えれば、受け身のやさしさ。これでは、日本人のやさしさに期待して助け合いの地域をつくろうとするは心もとない。

「前のめりの善意」を日本人はあまり好まない

これは欠陥というよりは、そういう性質だと理解した方がいい。「小さな親切、大きなお世話」といった言葉があるが、積極的な善意を茶化すようで、あまり気持ちのいいものではない。

逆に言えば、前のめりの善意が日本人はあまり好まないらしい。前のめりの善意と言えば「ボランティア」という言葉がぴったりだ。

日本では、要援護者の助けられ方の特徴もまた、奥床しいと表現できる。困った時に自分から助けを求めて声を上げたり、助け手を見つけてしてほしいことをお願いするといった積極性はない。

担い手と受け手の双方が奥手となると、これは大変だ。

①横並びのやさしさ

周りがやさしければ、私もやさしくする

②奥床しきやさしさ

頼まれなくても助けるのは「お節介」

進んで人を助ける(ボランティア)のは「でしゃばり」

③受け身のやさしさ

日本の福祉機関の調査

「足元に困った人がいたらどうするか？」

- ①「頼まれなくても助ける」が23%
- ②「頼まれたら助ける」が72%
- ③「ことわる」が5%

④閉じたやさしさ

身内なら助ける

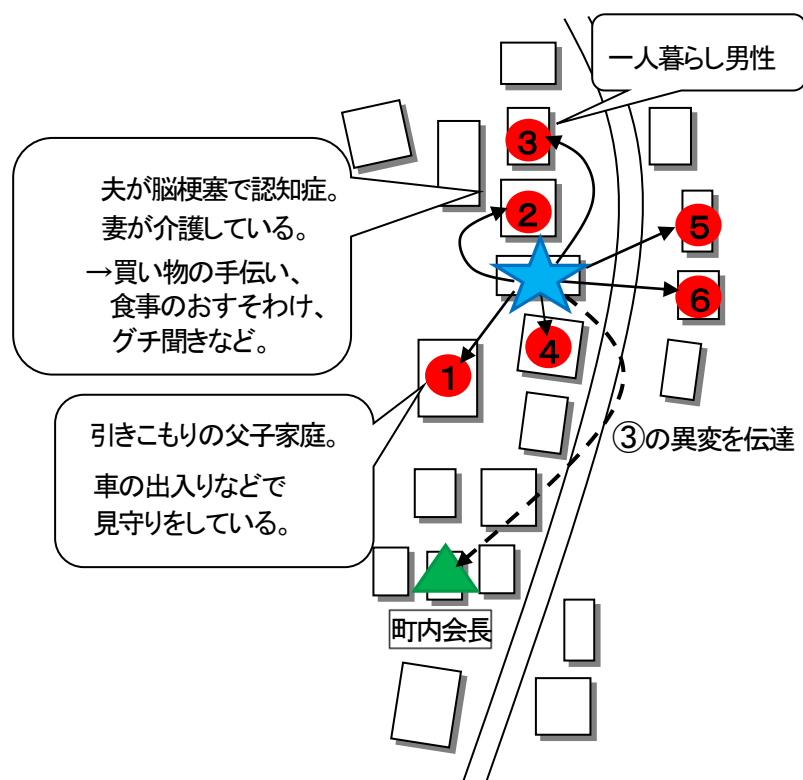
4.日本でやさしいのは“世話焼きさん”

■30年間、全国で「支え合いマップ」を作ってきた結論は…

日本人のやさしい人とは、「世話焼きさん」だった。

これは天性の資質で、困っている人がいると気になって放っておけないという人だ。支え合いマップを作れば、世話焼きさんは見つかる。

■下のマップの★印は80歳近い要援護の女性だが、いつも周囲の人たちの安否を気遣い、悩み事に耳を傾ける。③の一人暮らしの男性が要介護になってからは、毎日、彼女がおむつ替えまでしている。



■しかしこのように、ご近所で助け合いを始められるような大型の世話焼きさんは、どこにでもいるというわけではない。たまたま世話焼きさんのいるご近所では、少なくともこの人を中心に助け合いはできるだろうが、

それ以外のご近所ではむずかしい。

当事者同士が助け合っていた

■では、どうすればいいのか。ヒントは、担い手ではなく当事者の活動にあった。要援護の当事者は、自分が抱えている困り事を解決する必要があるので、何かしら行動せざるを得ない。よく調べてみると、一人暮らし高齢者がご近所内で、仲間同士で見守り合ったり、当事者を含めたご近所さん同士で助け合っているというケースは多いのだ。

■ということなら、もう1つ、「自助マップ」を作ることで、可能性が見えてくることがわかったのだ。

5.日本でどんな福祉をつくれればいいの？

他の人の支援を得ながら解決する新型自助

■当事者同士の助け合いは、自助の一環だ。そもそも自助とは、一般的には自分の問題を自力だけで解決することだと思われているが、特に要援護者は、それでは難しい。これからは、自助とは「自分の問題解決に主体的に取り組み、必要に応じて他の人の支援も得ながら、解決すること」と定義する必要がある。

■今までの福祉は、担い手主導の福祉であった。ところが、ふたを開けてみたら、日本人のやさしさはかなり消極的で、福祉のまちをつくるには少々力不足であることがわかった。

そこで、これまで見過ごされてきた当事者の自助力を強化し、広げていくことに取り組んだらどうか。

自助型の地域福祉活動で問題に対応できる

■つまり発想を転換して、当事者の側を福祉の主役に持ってくる。当事者が自助という発想で、自分たちのこととして、地域の福祉を考えていくのだ。例えば、日々の困り事は、まずはそれぞれのご近所で、同じ当事者たちで協力して問題を解決し合う。もっと強力な資源が必要な場合は、地域の大資源と結託して、そこから引き出す。

■一人暮らし高齢者の困り事の1つである買い物について、あるご近所内で当事者がどのように解決努力をしているか調べたら、①自分で電車を乗り継いで買い物に行く、②息子や娘が来た時についでに買ってきてもらう、

③ご近所さんをお願いする、④注文したものを取り寄せてくれる店を見つけてみんなで利用する、⑤移動販売を活用する、の5つの方法を駆使していることがわかった。ここまでわかれば、各当事者がどの方法を採用するか決めて、行動すればいい。こうなると一種の地域福祉活動と言える。自助発の地域福祉活動。これをご近所さんたちと共同でやればいいのだ。



6.人のやさしさに期待する福祉から、当事者が自前で問題解決する福祉へ

■これまでは、専ら住民の「やさしさ」に期待する地域福祉であった。しかし支え合いマップ作りをしても、当事者が地域住民の善意に期待している部分は意外に少なく、逆に、前頁のように、当事者が自分たちで助け合っている部分の方が多いのだ。

■このマップを関係者に見せると、みんな興味を示す。これまで、当事者がこんなに自分たちで解決行動をとっていることに気付かなかったという。「へえ、当事者もなかなかやるじゃないか」といったところなのだ。

これからほしいのは「ヘルプ」よりも「サポート」

■これまでの福祉は担い手主導で、当事者は一方的に提供されるサービスを受けるだけの「対象者」だったが、個々に見れば、じつは様々な自助努力をしていて、当事者同士の助け合いなど、地域福祉活動とも言える活動に発展しているケースもある。

■といっても、要援護であるから、やはり自助努力をするにも、手助けが必要だ。だからこれから福祉に求められるやさしさとは、ヘルプをくれるやさしさでなく、当事者が自助活動をするためのサポート役なのである。

住民流福祉総合研究所

木原孝久

〒350-0451

埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 1 4 7 6 - 1

Tel.049-294-8284

kiharas@msh.biglobe.ne.jp

<http://juminryu.web.fc2.com/>
